

研究会の記録

一 共同研究の設定

一九八一年に始まった国立歴史民俗博物館の共同研究は、いくつかの個別のテーマによる研究の他に、大きな研究課題を設定して長期的に実施する共同研究を二つ設けた。一つは「都市における生活空間の史的探究」、もう一つは「日本における基層信仰の研究」である。前者の第一期の研究は一九八一年に開始され、一九八三年までの三年計画で行われたが、事実上延長され一九八五年まで行われた。この第一期の研究は内部を四つのチームに編成したが、その編成基準は時代であった。すなわち①古代都市の研究、②中世における地方政治都市、③近世江戸町方の研究、④近・現代における都市生活の変化に関する研究という、歴史研究のオーソドックスな時代区分に基づいて編成されたものであった。したがって、各研究チームの研究者はそれぞれの時代の研究者を中心に組織されていた。この時代区分に基準を置くチーム編成は、各チーム間の対話交流を少なくする結果となり、歴史貫通的に都市研究としての全体像を結実させるよりも、各時代の研究課題のなかで都市を扱う傾向をもたらすとともに、歴博の特色ともいうべき三学協業をむしろ阻害する面を

有していた。

福田アジオ

そこで一九八六年からの第二期の共同研究は、時代区分の基準をなくして、都市研究の多様な問題を時代を超えて縦横に論じ検討するチーム編成にすることとなった。それが次のような四チームの編成であった。すなわち①都市空間の形成過程についての研究、②自然環境からみた都市空間の研究、③都市における祝祭と歓楽についての研究、④都市絵画・都市図の総合的研究である。これによって、特定の時代の研究者内部の会話ではなく、総合的多角的に時代や専門を越えた研究者が共同研究する可能性が出てきたと言えるし、またその試みもなされた。しかし、各チーム間の交流や共同しての論議や検討は必ずしも十分に行われなかった。第二期の研究は一九八八年度までの三年間であったが、一部発足が遅れたこともあって翌八九年まで行われた。そして、この第二期の研究が進められている間に次の第三期の研究計画が検討され、それまでの第一期、第二期の反省の上に立って新たな枠組みの研究が計画立案され、一九九〇年度から九二年度までの三年間実施された。

第一期が時代別編成、第二期が問題別編成であったのに対して、第三期は統一課題による編成とした。すなわち、それが「都市における交流

空間の史的研究」である。それまでのチーム編成は大きくは都市の生活空間の史的研究であったが、各チームの独立性が強く、事実上別々の共同研究であったと言っても過言ではない状態であった。そこで、全体が一つの課題であり、それを分担し、それぞれの角度から切り込むのが各

二 研究組織

研究代表者 福田アジオ 国立歴史民俗博物館

和崎 春日 日本女子大学人間社会学部

稲田 孝司 岡山大学文学部

市川 秀之 大阪狭山市教育委員会

藤田 裕嗣 徳島大学総合科学部

瀬田 勝哉 武蔵大学人文学部

稲田 篤信 東京都立大学人文学部

中岡 義介 佐賀大学理工学部

橋爪 紳也 京都精華大学人文学部

チームであると考えて編成した。そのチームは①権力表象の場と儀礼、②道と川、③広場である。それぞれ交流空間としての都市のあり方を把握するための事象として設定された。ここに収録するのは、この三チームのうちの「広場」の研究成果である。

小林 忠雄 国立歴史民俗博物館

白石太一郎 同右

小島 美子 同右

湯浅 隆 同右

小島 道裕 同右

千田 嘉博 同右

福原 敏男 同右

阿部 謹也 同右(客員)

三 研究目的

ヨーロッパの都市がその中心に必ず広場をもっているのに対して、日本の都市には広場がないという考え方が広く行われてきた。それは、日本の都市が政治権力によって作られたものであり、市民欠如を空間的に示すものとされるが、果してそのように言えるのであろうか。人々の交流空間としての広場は日本の都市においても形成され、生活の一部とし

て大きな役割を果たしてきたのではなからうか。

今回の共同研究では、日本における都市生活空間としての広場の歴史的特質を明らかにすることで、全体計画としての都市における交流空間の史的研究に迫ろうとするものであった。

四 研究実施実況

〈一九九〇年度の記録〉

第一回研究会 一九九〇年六月三〇日 於国立歴史民俗博物館

・福田アジオ「『都市に於ける交流空間の史的的研究―広場―』の課題と

問題点」

・今後の研究計画について

第一回現地調査 一九九〇年九月二三日

・「奈良盆地における広場の歴史的景観の現地調査」

(中世興福寺の市場、大和盆地の村落広場など)

奈良市餅飯殿町・南市町・橋本町・東向北町

天理市丹波市町(市神社周辺)・乙木町

桜井市旧海柵榴市跡

大和郡山市若槻町

〈案内―藤田裕嗣・市川秀之〉

第二回研究会 一九九〇年九月二四日 於奈良大学

・福原敏男「市と市神」

・藤田裕嗣「中世における広場と市場」

・千田嘉博「中世城下町と広場 考古学的視点より」

第三回研究会 一九九〇年二月一九日 於武蔵大学

・小島道裕「市場法・都市法と『広場』―住民のいない都市―」

・市川秀之「泉州の広場」

・福田アジオ「ムラに広場はあったか」

第四回研究会 一九九一年二月二三日 於武蔵大学

・湯浅 隆「近世都市江戸における広場について」

・稲田篤信「辻と文学」

〈一九九一年度の記録〉

第一回現地調査 一九九一年六月九日 「近代の広場的空間」

(通算第二回) 大阪市 新世界、合邦の辻、一心寺、四天王寺、飛

田新田

同年六月一〇日「現代の広場的空間」

大阪市 海遊館・海遊館前広場

第一回研究会 一九九一年六月一〇日 於海遊館内会議室

(通算第五回)

・中岡義介「広場―地区―都市―空間と場所」

・橋爪紳也「近代都市における広場的空地の計画思想について」

第二回研究会 一九九一年一〇月七日 於国立歴史民俗博物館第二研

修室

(通算第六回)

・小林忠雄「山は都市である―山岳寺院と広場」

・和崎春日「カメルーン・バムン王権社会における王都広場の特質に

ついて―広場で行われた儀礼を主な手がかりとして―」

第三回研究会 一九九一年二月一八日 於東京弥生会館

(通算第七回)

・小島美子「合唱はひろばから生まれる？」

・阿部謹也「個人と社会—ヨーロッパと日本を比較して」

第二回現地調査 一九九一年二月一九日 「江戸の広場」

(通算第三回) 東京都 湯島聖堂、神田明神、湯島天神、上野広小路、浅草寺、回向院、富岡八幡宮

第四回研究会 一九九二年三月一八日 於国立歴史民俗博物館第二会議室

議室

(通算第八回)

・柴原永遠男「奈良、平安時代の市」

・白石太一郎「古代の衢(ちまた)をめぐる」

〈一九九二年度の記録〉

第一回研究会 一九九二年八月七日 於武蔵大学

(通算第九回)

・小笠原恭子「広場と芸能—その時空間—」

・瀬田 勝哉「大売出しの源流—冠者殿小考—」

第二回研究会 一九九三年一月三〇日 於武蔵大学

(通算第一〇回)

・福原敏男「神幸の『広場的時空』—権力表象の場と儀礼・芸能—」

・橋本裕之「棧敷のドラマトゥルギー—中世の祭礼を見物する—」

第三回研究会 一九九三年三月二四日 於国立歴史民俗博物館大会議室

(通算第一一回)

・総括討論

・研究報告刊行について

五 研究成果の概要と反省

課題

初年度の第一回研究会で提示された検討すべき課題は以下のごとくであった。

① 空間としての広場

広場の定義

広場の実体

広場の機能

② 象徴としての広場

広場観の変遷

広場の比較史

広場の象徴性

成果

上記のような個別の検討事項を別々に切り離して議論するのではなく、各人の研究課題のなかで相互に関連付けて考察することを基本的方針として三年間の研究は進められた。そして、各研究会および調査を通して、次のような諸点が明らかになってきた。

(一) 実体としてあらかじめ設定された空間ではなく、人々が空地に一定

の意味を与えることで、特定の意味を持つようになった空間が広場として存在してきたのではないか。それは「広場的」という表現で多くの議論では示された。広場はすぐれて人々の空間認識の問題であり、必ずしも屋外の空地のみを想定する必要はないという幅広い共通理解ができた。

(二) そして具体的には恒常的な施設ではなく、市、広場、寺社境内、棧敷等臨時的に人々が集合する空間としての広場が数多く存在してきたことが歴史学、地理学、考古学等の研究成果の総合によって明らかにされた。また、発掘結果や画像類において、集落部分において何もない空間の存在を指摘できるが、その意味を広場として理解出来るかどうか、学際的に検討が進められ、それらが臨時的に広場の機能を持った可能性が論じられた。

(三) 日本の村落社会には特定の広場的な空間があることが明らかにされた。しかし、それはその村落社会成員にとつてのみ意味のある空間であり、いわば共同体的な広場ということが出来る。これに対し、都市における広場は互いに面識関係のない群衆の集合する空間としての意味があり、その点で村落の広場と都市の広場の間に安易に連続性を見ることができないという認識も獲得された。

(四) 日本の都市の広場を、南米やアフリカの都市における広場の在り方

との関連で考察し、比較史的な理解を進めることが出来た。そして、広場がすぐれて権力と結びついた象徴的な儀礼の場であり、安易に広場＝市民の存在とすることができないことが明らかになった。広場で展開する様々な儀礼は、日本における都市空間のなかの儀礼空間についても視野を広げることとなった。

(五) 全体としては日本の都市における広場を全時代を通じて統一的に明らかにすることは出来なかったが、日本の都市においても広場は形成され、展開してきたことは間違いないということ、およびその多様な在り方を明らかにし、そこに都市の交流空間の場を確認したことが本研究の成果と言えよう。

反省

今までのどの共同研究も皆同じであるが、共同研究と言っても研究をするための費用、時間、施設等が十分には確保されておらず、単に年数回の研究会開催を主内容とする共同研究であった。したがって、共同研究員各人がすでにそれまでに蓄積していた研究成果の一端を発表してもらおうという研究会に終始し、独創的な研究を新たに展開することは出来なかった。その点で共同作業を基礎とした共同研究にならなかった点が最大の反省点であり、また問題点であると言えよう。

(新潟大学 人文学部)